

学校の教育目標を踏まえた学力向上の重点目標

藍住南小学校  
「学力向上実行プラン」

- ・学習指導要領を踏まえた指導方法と評価の工夫改善
- ・「主体的・対話的で深い学び」の実現

学力向上検討委員会構成

学力向上推進員  
教諭  
城所絵里

委員

校長(藤本武)教頭(岩佐宣之)6年主任(元木里美)1年主任(西谷基子)2年主任(高原まゆみ)3年主任(古川加寿美)4年主任(吉岡千江美)5年主任(森脇沙夕夏)特別支援コーディネーター(堤さよこ・糸林麻都香・酒巻愛子・瀧口悠里)指導方法工夫改善担当(山口夕子)

校長

藤本 武

【小中連携または中高連携における共通の取組】

児童生徒の学ぶ意欲向上のための授業改善(自分の強みを伸ばし、共同的に学び合う教職員集団)

【各校の取り組み情報の把握について】

管理職による授業参観や教員からの報告等、様々な機会を捉え、取り組み状況の把握を行う。

◎次の(1)～(3)をバランスよく取り組み、学力の向上を推進

(1)知識・技能の習得

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○漢字学習や計算学習に前向きに取り組んでいる児童が多い。 ●学力に個人差があり、基礎基本の定着に課題を持つ児童が見られる。漢字を確実に覚えておらず、文章中で適切に使えていない。 ●語彙力が乏しく、読解力や聞き取る力、文章を書く力が不足している。	①基礎的・基本的な知識・技能について学年相応の力を身に付けることができる。 ②語彙数が増え、正しい言葉や漢字で読んだり書いたりすることができる。 ③各教科の単元テストで、低学年は8割以上の児童が正答率80%、中・高学年は7割以上の児童が正答率75%を超えるようにする。	①朝のドリルタイム等を活用し、漢字・計算やICTの基礎・基本の定着を図る。 ②語彙数を増やすために、音読や週末読書、NIEを継続的に実施する。 ③低学年は、視写を継続的に取り入れ、中・高学年で辞書を活用する。	①朝の学習タイムで漢字・計算の学習やICTの基礎基本を継続的に行う。低学年はコグトレを取り入れる。 ②阿波っこタイムズなどを活用し、週に一度NIEの曜日を決めて取り組む。視写や辞書の活用を継続的に実施する。 ③また、本の紹介や、分類番号で本を借りるなど様々な本に親しむ機会を増やす。	①漢字・計算やICTの基礎的・基本的な技能について、学年相応の力が付いてきた。コグトレをすることで聞く力が育ってきているが、時間確保が難しい。 ②NIEの曜日を定めることで、確実に実施できている。 ③視写をすることで、速く丁寧に書ける児童が増えてきたが、書いた文章を自分で推敲したり、表記や句読点を意識したりして書くよう指導していく必要がある。3年生から個人用の辞書を取り入れているが、学年によって活用に差が見られた。	①朝の学習や授業の中で、漢字・計算やICTの基礎的事項、コグトレなどを継続して行う。 ②語彙数を増やすために、様々な本に親しむ機会を増やし、音読や週末読書・NIEを継続的に行う。 ③低学年は、視写教材を継続的に取り入れ、文章を正しく書く力を養う。2年生の3学期から辞書を個人で持てるように保護者に推奨し、低・中・高続けて積極的活用を図る。

(2)思考力・判断力・表現力等の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ペアトークやグループトークの実践や継続により、自分の考えや思いを表現できる児童が増えてきた。 ●発展的に考えたり、自分なりに工夫して考えたりする児童が少ない。 ●全体の中では自信が持てず、自分の考えを表現できる児童が少ない。	①目的に応じて、理由を明らかにしながら、自分の考えや思いを適切に文章に表現することができる。 ②友達との考えと自分の考えを比べながら、聴き、考えをまとめたり伝えたりすることができる。 ③考えたことや伝えたいことを、適切な音量や速さで話すことができる。	①自分の考えや思いを文章に書いたり、タブレットやホワイトボードを使って人に伝えたりする活動を取り入れる。 ②「発表名人」を意識させたり、振り返りの視点や型を提示したりする。 ③ペアトークやグループトークを継続して行うことで、相手に伝わるような話し方を身に付けさせる。	①スピーチや発表で、ICTを効果的に活用する。 ②ICTの活用により時間の効率化を図り、考えを共有することで発表が苦手な児童も考えを発信する自信をもたせる。 ③振り返りの時間を確保し、短い時間でもできるようなハンドサインや選択式でできるような工夫をする。	①高学年は、スピーチや発表、振り返りなどで、ICTを効果的に活用することができた。 ②低・中学年は、学年の発達段階に応じて少しずつICTを活用できるよう取り組んでいる。 ③振り返りでは、自分の言葉で話せる児童が増えてきている。	①スピーチや発表で、ICTを効果的に活用する。 ②ICTの活用により時間の効率化を図り、考えを共有することで発表が苦手な児童も考えを発信する自信をもたせる。 ③ペアトークやグループトークを継続して行うことで、相手に伝わるような話し方や適切な声の大きさを身に付けさせる。

(3)主体的に学習に取り組む態度の育成

児童生徒の状況(○よさ・●課題)	具体的目標(目指す子供の姿)	具体的方策(教員の取組)	中間期の見直し	達成状況(評価)	次年度における改善事項
○ほとんどの児童に「あいなん学習ルール」の定着がみられる。課題に真面目に取り組もうとしている。 ●自主学習の習慣が付いている児童と、まだ身に付いていない児童の差が大きい。正しい姿勢を保持しにくい児童が多い。	①「あいなん学習ルール」を身に付け、主体的に学習に取り組むことができる。 ②自分のめあてをもって自主学習に取り組むことができる。 ③単元ごとの振り返りを行うことによって、主体的に学習することができる。	①「あいなん学習ルール」を継続して指導し、月ごとに振り返る機会を設け、結果をまとめて掲示する。 ②「家庭学習の手引き」や「自主学習のめあて集」を活用して主体的に学ぶ習慣を付けさせる。 ③タブレットを使用して、単元ごとの振り返りをさせ、今後の指導に活かす。	①「あいなん学習ルール」の振り返りをタブレットで引き続き行くと同時に、始業のチャイムで授業を開始することを徹底する。 ②低学年は、単元ごとの振り返りを言葉でノートにまとめたり、発表したりして振り返りの練習をする。	①毎月のタブレットを活用した振り返りによってルールを守ろうとする意識が一時的に高まったが、姿勢の保持が難しい児童が多かった。 ②定着はしつつあるが、取り組み方に差がある。 ③振り返りの際に、単純な表現で終わってしまう児童もいる。	①「あいなん学習ルール」をより意識できるような機会を増やす。 ②「家庭学習の手引き」や「自主学習のめあて集」をより活用できるよう支援する。 ③振り返りの際のモデルを提示する。

令和5年度 学力向上ロードマップ

